

映画で語る アイルランド

岩見寿子 宮地裕美子 前村敦 著

ア リ ケ 幻
イ ア ル 想
ル ル ト の
ラ な か
ン ら
ド
へ

論
創
社

はじめに

本書を手にとっていただいた読者の方々には、最初にお断りしておかなければならないことがある。ここで取り上げる「アイルランド映画」というのは、日本映画、フランス映画、韓国映画といった国名を冠した映画の概念とはだいぶ異なっているということだ。

昨今は、映画制作のボーダーレス化が著しく、〇〇映画という国名がついた映画の表記が必ずしも妥当とはいえない作品も増え続けているが、それでも、制作資金を国内で調達し、自国の監督、キャスト、スタッフで固めた、いわゆる国産映画という分類は健在だろう。

しかし、「アイルランド映画」の多くは国産映画の定義にはあてはまらない。なぜなら、長編劇映画に限って言えば、アイルランド国内で作られた作品より、国外で作られた「アイルランド映画」の方がはるかに多いからである。映画誕生の時代から1980年代はじめ頃まで、「アイルランド映画」とは、アイルランドを舞台にしてはいるが、外国資本で制作されたものを指していたといっても過言ではなかった。

ところが、アイルランド人監督による2本の映画『マイ・レフトフット』（ジム・シェリダン監督1989）と『クライング・ゲーム』（ニール・ジョーダン監督1992）がオスカー（米国アカデミー賞）を受賞したことで大きな転機が訪れた。世界は、素晴らしい才能を生み出したアイルランド映画界に目を向けることになったからである。

1990年代には、アイルランドをとりまく状況は劇的に変化する。「アイルランド映画ルネサンス」と称されるほど、アイルランドをテーマにした話題作が相次いで制作された。国産映画が存在感を示すようになり、英米や欧州各国との合作も増えた。海外資本で監督は外国人であっても、原作者がアイルランド人で、アイルランド国内で撮影されるなど、制作状況の多様化が特徴となっていく。

以上のような事情を踏まえて、本書でとりあげる「アイルランド映画」とは、アイルランド国産映画にこだわらず、アイルランドをテーマにした作品すべてを含んでいる。その一方で、アイルランド人監督の作品であっても、またアイルランド人俳優が出演していても、アイルランドをテーマにしていないものは除外している。

次に本書の構成に触れよう。

第1章は、日本ではほとんど知られていない、アイルランドの映画史を黎明期から現在まで5つの時期区分をして、アイルランドの社会的文化的状況とからめながら概観する。

第2章は「アイルランド映画」の作品研究である。Part1では、1930年代から1980年代までの時期に、イギリスやアメリカの巨匠監督が撮ったアイルランドものの古典的作品6本を取り上げて分析する。Part2では、アイルランド国産映画が脚光を浴びるきっかけとなった『マイ・レフトフット』から、1990年代の「アイルランド映画ルネサンス」の作品を中心に、2000年以降の国際的評価の高い作品までをとりあげて読み解いていく。

第3章では、アイルランドを舞台にした映画を6つのテーマに分類し、それぞれのテーマの作品を数本ずつまとめて紹介する。そうすることで、「アイルランド映画」の固有の傾向とは何かを探ろうとする試みでもある。

第4章ではアイルランド出身で海外でも知名度の高い5人の監督と、幅広い世代の13人の俳優を取り上げる。彼ら彼女らは国際的にめざましい活躍をしている一方で、アイルランド人としてのアイデンティティーを決して忘れることのない代表的な存在である。

ほかに「アイルランド映画」に関する6つのトピックをコラムとして取り上げた。

最後に、書名を『映画で語るアイルランド』とした理由を簡単に述べておきたい。本書はアイルランド映画のガイドブックではなく、アイル

ランド映画全般を網羅的に取り上げているわけでもない。いわゆる名作やヒット作品だけを選んでいるわけでもない。著者らが主観的に選んだ映画作品を切り口として、アイルランドの歴史と文化、社会、風土と自然を描くことに主眼がある。

副題を<幻想のケルトからリアルなアイルランドへ>としたのにも説明を要しよう。日本で一般的に流布している「ケルト」という言葉には「幻想的」「神秘的」「超俗的」イメージがつきまとう。けれども「ケルト」だけでは解き明かせないものがアイルランドにはたくさん存在する。映画の中には、幻想的で不可思議なアイルランドを描くものもあるが、一方で、アイルランドには現実の社会があり、血の通った人びとが生きていることを、スクリーンを通して知り、感じることができる。

私たちは、あまりよく知らない異国に自分たちの勝手な希望を投影して桃源郷のように理想化することがある。あるいは逆に、自らの中に存在するのを認めたくないような暗黒面を外国の文化に投影して否定的に見る場合もある。映画を通して異文化を知るというのは、幾重にもバイアスがかかるがゆえに容易なことではないが、本書でとりあげたさまざまな作品を通して、「ケルト」の呪文から解き放たれ、アイルランドを新たな視点で見えていただけるならば、これに勝る喜びはない。

岩見 寿子

宮地裕美子

前村 敦

はじめに …II

第 1 章

アイルランド映画の歴史

アイルランド映画史概観 岩見寿子 …002

Column X 線とアイルランドの映画の始まり …016

Column アイルランド語の映画 …018

第 2 章

アイルランド映画作品研究

Part1 アイルランド映画のクラシック 岩見寿子

『アラン』（1934 年）「リアル」とは何か …022

『邪魔者は殺せ』（1947 年）疎外された場所 …027

『静かなる男』（1952 年）内なる故郷への帰還 …032

『ライアの娘』（1970 年）「正統派メロドラマ」の復権 …037

『エクスカリバー』（1981 年）神話と伝説の舞台 …042

『ザ・デッド／「ダブリン市民」より』（1987 年）計算され尽くした演出の味わい …047

Column 映画に使われたアイルランド音楽 …052

Part2 アイルランド映画のルネサンス 岩見寿子 前村 敦 宮地裕美子

- 『マイ・レフトフット』(1989年) 語りの構造 …056
- 『フールズ・オブ・フォーチュン』(1990年) アングロ・アイリッシュの危うさ …061
- 『ザ・コミットメンツ』(1991年) 階級と音楽 …073
- 『ヒア・マイ・ソング』(1991年) 止まった時計 …078
- 『クライング・ゲーム』(1992年) アイルランド・ナショナリズムとアイデンティティー …083
- 『白馬の伝説』(1992年) 西へ〜異郷への眼差し …091
- 『父の祈りを』(1993年) 北アイルランドの「父」と「息子」 …096
- 『フィオナの海』(1994年) アメリカへ〜誰に向かって描いたのか …101
- 『ナッシング・パーソナル』(1995年) 分断された都市の運命 …105
- 『マイケル・コリンズ』(1996年) 映画技法から見えてくる主題 …110
- 『ジェネラル 天国は血の匂い』(1998年) 戻れない物語 …118
- 『アバウト・アダム アダムにも秘密がある』(2000年)
- モダン都市ダブリンの大人のファンタジー 付論『サークル・オブ・フレンズ』(1995年) …124
- 『ブラディ・サンデー』(2002年) ドキュメンタリーとフィクションの境界 …129
- 『麦の穂をゆらす風』(2006年) イギリス第一番目の植民地が経た苦悩 …135
- 『ONCE ダブリンの街角で』(2007年) 偶然の味わい …148
- 『ブルックリン』(2015年) 居場所はどこにあるのか …153

Column 「語りの国」のアニメーション映画 …158

第3章

テーマから見るアイルランド映画 岩見寿子 宮地裕美子 前村 敦

- 独立戦争と内戦を描いた作品群 …162
- 文芸作品を原作とした映画 …167
- 回想のアイルランド …172
- 移民が夢見る「アイルランド」 …178
- アイルランドでも凶悪犯罪は起きる …184
- 映画が描く北アイルランド …188

Column アウトサイダーとしての漂泊民 …196

第4章

アイルランド映画のトップランナー

Part1 監督 宮地裕美子

- 1 パット・オコナー …200
- 2 サディアス・オサリヴァン …202
- 3 ジム・シェリダン …204
- 4 ニール・ジョーダン …206
- 5 ジョン・カーニー …208

Part2 俳優 宮地裕美子 前村 敦

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 1 モーリン・オハラ …212 | 8 ブレンダン・グリーソン …226 |
| 2 ピーター・オートール …214 | 9 ジェームズ・ネズビット …228 |
| 3 ブレンダ・フリッカー …216 | 10 コリン・ファレル …230 |
| 4 スティーヴン・レイ …218 | 11 キリアン・マーフィー …232 |
| 5 ガブリエル・バーン …220 | 12 ジョナサン・リス = マイヤーズ …234 |
| 6 リーアム・ニーソン …222 | 13 シアーシャ・ローナン …236 |
| 7 ピアース・ブロスナン …224 | |

Column 映画を支える実力派たち …238

あとがき …240

資料 …i

日本で公開されたアイルランド映画リスト …ii

アイルランド歴史略年表 …x

アイルランド映画史年表 …xii

アイルランド全土地図 …xiv

人名索引 …xv

映画題名索引 …xxii

第 1 章

アイルランド映画の歴史

アイルランド映画史概観

岩見寿子

※本章の本文中で太字になっている映画タイトルは、2章の作品研究に取りあげられている作品を示す。

アイルランド映画とは何か

1963年に、あるアメリカの映画批評家は次のように述べた。「いかなる意味においても、アイルランド映画というのは未だ存在していない。おそらくは、アイルランド人の詩的な感受性が、言語から視覚的なものへと変容することが必要とされているのかもしれない。この国には、劇的な感受性は十分に備わっている。新しいメディアがひとたびアイルランド人の空想力の真髄に触れさえしたら、この小国はかつて文学の分野で成し遂げた以上の影響力を、映像の分野で及ぼすかもしれない。」*1

*1

Anthony Slide, *The Cinema and Ireland*, North Carolina: McFarland & Company, 1988.

*2

Kevin Rockett (ed.) *The Irish Filmography: Fiction Films 1896-1996*, Dublin: Red Mountain Media, 1996.

本書をもとにしてダブリン大学トリニティ・カレッジが、アイルランド映画データベース・サイトである Irish Film & TV Research Online を運営している。

<http://www.tcd.ie/irishfilm/film.php>

「はじめに」で書いたように「アイルランド映画」というのは、日本映画やフランス映画といった国産映画を指す言葉ではない。映画100年の歴史において、アイルランドに関連する映画を網羅した『アイリッシュ・フィルモグラフィ』*2という労作があるが、この本の最大の特徴は、作品の分類が、ジャンル別でもなく、年代順でもなく、監督や俳優別でもなく、国別(13か国)になっていることである。この本独特の分類によって、「アイルランド映画」についての以下のような興味深い現象が明らかになる。

1. 収録された約2000本のデータのうち、アイルランド国内で制作されたのは約10分の1にすぎない。

2. アイルランドで制作された作品(約200本)のうち、1980年代以後に作られた映画が半分以上を占める。

3. アメリカとイギリスで制作された「アイルランド映画」が総数の半分以上を占める。

4. アメリカ、イギリス以外で「アイルランド映画」の制作本数が多いのは、オーストラリア、カナダなどのアイルラ

ンド系移民の多い地域である（アイルランド系移民の子孫は、全世界で7000万人、うち約4000万人がアメリカ国民といわれる）。

長年にわたって外国制作の「アイルランド映画」が量産されてきた現実に対し、アイルランドの批評家や映画研究者は、ナショナリスティックな憤りをもって、外国人監督が描いてきたアイルランド像は全く主観的なもので、実在しない空想的なアイルランドがもっぱら表現されてきたと批判した。1980年代に入ってから、ようやく自国の監督が長編映画を制作する環境が整えられてきたが、その多くは独立プロダクションによる低予算の作品であって、大手の映画配給網にはのらず、国際的にはおろか国内においても商業公開されることは期待できなかった。

しかし『マイ・レフトフット』(*My Left Foot*, 1989) と『クライング・ゲーム』(*The Crying Game*, 1992) のオスカー受賞が、アイルランド映画産業にとっての一大転機となった。1990年代になると、多くの新人監督の作品がアイルランドの国境を越えて上映される機会が飛躍的に増えたが、そのような事態は、つい一昔前までは想像もできないことであった。

現在に至るもイギリス人やアメリカ人監督が撮った「アイルランド映画」は健在である。けれども、かつてのように海外資本による「アイルランド映画」が、外国人の視点で、アイルランドを紋切型に描いているとして一口には評価できなくなっている。海外資本で監督は外国人、イギリス人やアメリカ人の役者がアイルランド人を演じていたとしても、アイルランド人作家の原作で、アイルランド国内で撮影されるというケースが増えているからである。これらの映画の中には、国産のアイルランド映画と比べても、アイルランドの社会や歴史を巧みに描いている点で遜色ないものもある。

1990年代にアイルランドは、この国の歴史上初めての映画制作ブームにわいた。ただし、それらの多くは国産映画ではなく、グローバル化の波にのった多国籍資本のもとで制作されたものである。たとえばニール・ジョーダン監督の『マイケル・コリンズ』(*Michael Collins*, 1996) は、イギリス人プロデューサーのもとで、アメリカの資本を得て、アイルランド現代史を銀幕に再現した作品である。かつての「映画後進

*3

リチャード・エルマン著、宮田恭子訳『ジェイムズ・ジョイス伝1』みすず書房 1996 年

*4

The Lad from Old Ireland

監督：Sidney Olcott

10 分 サイレント

アメリカに移民して財をなした若者が、故郷のアイランドに戻って恋人の窮地を救ったのち結婚する。

*5

The Colleen Bawn

監督：Sidney Olcott 短編

(分数不明) サイレント

1860 年の同名の戯曲を原作とする。没落しかかっている地主の息子が村娘と密かに結婚するが、それを知らない母親によって、裕福な家の娘との結婚を迫られることから起こる事件の顛末を描く。

*6

Willy Reilly and His Colleen Bawn

監督：John MacDonagh

90 分 サイレント

18 世紀を舞台に、カトリックの青年とプロテスタントの娘が周囲の助けを借りながら、宗派の違いを乗り越えて結ばれる。

*7

イースター蜂起

Easter Rising

1916 年 4 月、英国からの独立をめざす共和主義者が蜂起を遂行し「アイランド共和国宣言」を発したが、英国軍によって 1 週間で鎮圧された。蜂起主導者 15 名が処刑されると、当初冷淡であった世論は独立を支持する流れへと変化した。

*8

In the Days of St. Patrick

監督：Norman Whitten

80 分 サイレント

アイランドに初めてキリスト教を布教した聖パトリックの事跡をスペクタクルに描く。

国」アイランドは、英語圏という強みを生かし、外国の力（資本や配給網）を利用しつつ、自分たちの歴史や文化を世界中にアピールしていくという、小国の映画制作のモデルケースになっていった。冒頭で引用した 1960 年代のアメリカ人批評家が想像もしなかったような形で、今やその言葉が現実のものになろうとしている。

以下では、「アイランド映画」の歩みを 5 つの段階に分けて考察していくことにしたい。

1 黎明期と初期映画 (1896 ~ 1921)

1895 年にリュミエール兄弟が、パリのグラン・カフェで初めて有料の映画上映を行った翌年には、ダブリンのミュージック・ホール（現オリンピア座）にて、アイランド初の映画上映が行われた。映画の上映は人気を集めたが、当時、オーストリア＝ハンガリー帝国の領土だったトリエステ（現イタリア領）に住んでいた青年ジェイムズ・ジョイスは、ダブリンに常設の映画館が一つもないことに目をつけ、イタリア人に投資をもちかけ、1909 年、ヴォルタ座をオープンした。しかし経営は他人任せだったため、1 年たたずして映画館はイギリス人興行主の手に渡った。*3

アイランドでの映画制作は、アイランド系カナダ人のシドニー・オルコットが、アメリカのケイレム社のために、1910 ~ 14 年の期間、ケリー州のキラニーで映画の撮影を行った時に始まる。*The Lad from Old Ireland*(1910)*4, *The Colleen Bawn*(1911)*5 が代表的な作品であるが、これらの映画は、アメリカ市場でのアイランド系観客の動員を見込んで作られたものだった。

1916 年には、キラニー出身でアメリカに移住し、弁護士として成功したジェイムズ・マーク・サリヴァンが、「アメリカ映画の父」D.W. グリフィスに影響を受け、ダブリンでアイランド映画社 (Film Company of Ireland) を起こした。サリヴァンはジョン・マクドナーを監督に起用して *Willy Reilly and His Colleen Bawn* (1920)*6 を撮った。マクドナーは 1916 年のイースター蜂起*7 で処刑されたトーマス・マクドナーの弟である。

アイルランド語の映画

アイルランド語とは何か？ その定義をフリー百科事典ウィキペディアから引用すると次のようになる。「アイルランド語はインド・ヨーロッパ語族ケルト語派に属する言語である。現存するゲール語の一つであり、しばしばアイルランド・ゲール語やアイリッシュ・ゲール語、あるいは西ゲール語とも呼ばれる」

ヨーロッパ大陸などから波状的断続的にアイルランドに入ってきた人たちはケルト語派の言語を話した。彼らはゲール人と呼ばれるようになるが、話す言語は同じインド・ヨーロッパ語族でもゲルマン語派の英語とは語派が異なる。顕著な文法的な違いは、動詞+主語+目的語の語順だろう。アイルランド・ゲール語のアルファベットは基本的には 18 文字あり、1 文字 v が加わり、19 文字といわれることもある。

新憲法が制定されたアイルランドは 1937 年、正式な国名をエール (Éire) に変更した。エールの名はゲール人の神話に登場する 3 女神の一人で国土を司るエリウに因み、その時点でアイルランド語はエールの第一公用語になり、2007 年からは EU 連合の公用語にもなっている。

1845 年の大飢饉以前には 800 万だったアイルランドの人口が、半世紀後には 470 万に減り、そのうちゲール語を日常的に使っていた話者は 1 割にも満たなかった。農民は生きていくために英語を懸命に習得して、アメリカを目指した人たちの中にはいただろうが、アイルランド語の話者として戻ってくることはなかった。

アイルランド語が第一公用語に位置付けられているものの、やはり英語が生活の中心を占める。そんなゲール語を再び活性化させようとして、2003 年当時の政府はエール公用語法を制定した。以来、すべての公文書が原則的に英語とアイルラ

ンド語で併記されることになった。

2016 年の国勢調査では、全人口 476 万の 1% がアイルランド語を話すとわかった。小中学校の義務教育でアイルランド語を学んだ後も絶えず触れてもらいたいとアイルランド語を扱うメディアも増え、奮闘している。TG4 はアイルランド語専門テレビ局であり、アイルランドと北アイルランドで地上波放送も行っている。最近では架空の村のロスナルンが舞台のドラマ、「Ros na Run」が若い視聴者に人気を得た。

アイルランド語の映画の代表作といえば、1959 年、1922 年生まれのジョージ・モリソンが監督した *Mise Éire* (英訳: I am Ireland) を挙げておきたい。モリソンは 61 年に 2 作目 *Saoirse?* (英訳: Freedom?) を制作したが、当初 3 部作として企画された 3 作目の内戦記録映像は完成していない。モリソンは、ニュースフィルムや記録写真、新聞記事や掲載写真を画像にふんだんに取り込み、1896 年から 1922 年までにアイルランドで起きた事件や政治状況の変化を 2 本のドキュメンタリー映画にまとめた。記録としても貴重な 2 作品は、全てアイルランド語によるナレーションが付き、一般公開された。これら 2 本の映画を制作したゲール・リン社は、1953 年に創立されて以来、現在もアイルランド語の教育を普及、音楽関連ソフト販売を行い、アイルランド文化の一翼を担う。なかでも、1960 年にアイルランドで公開された *Mise Éire* は、全編アイルランド人が作ったアイルランド語の 90 分長編映画だ。1896 年から 1915 年を *Awakening*、1916 年を *The Rising*、そして 1917 年から 1918 年までを *The Dawning of the Day* と題し、3 部構成で時代を区分している。

当時の首相ショーン・レマスは、アイルランド人としての生き方を提唱しており、その一環でアイデンティティーを鼓舞するものとして *Mise Éire* の公開を歓迎した。音楽を担当したショーン・オリアダは、アイルランド公共放送 RTÉ の音楽監督を務める一方、実験的にキョトリ・クーランという演奏グループを指導する音楽家だった。

1978 年、*Poitin* のボブ・クインも古いスタイルの伝統に魅せられたひとりでアイルランド語の映画を制作した。タイトルは、自家蒸留酒や不法に作られたウイスキーを意味するアイルランド語であり、クインはアイルランドの伝統を見直そうと、アイルランド・アーツカウンシルの助成を得て全編 60 分ほどのアイルランド語映画を撮った。

クインの映画は 79 年のセントパトリックスデーに RTÉ によって放送されたが、番組の放送終了後、アイルランド語の話者たちをステレオタイプ化したとして、物議を醸したといわれる。

1994 年、パディ・ブレスナックの *Ailisa* は、アイルランド語と英語との二言語使用のサイコスリラー映画だ。同年、女性監督ヌアラ・ニ・ドナルはアイルランド語映画 *An Gobán Saor* で、ケルトの石工のなぞを絡めた現代ドラマを撮った。また、テレビ映画を主に手掛けていたポール・デュアンヌはダブリンの役所勤めの男を主人公にしたアイルランド語の短編 *Misteach Baile Atha Cliath* (英訳: Mystic Dublin) を撮る。一方カハル・ブラック監督は *Korea* を制作し、米軍に志願しタイトルの「韓国」が従軍先になった若者とその父親世代の関係を一部アイルランド語で描いた。

さらにブレスナック監督は 97 年、アイルランド語が一部使用される犯罪コメディでブレンダン・グリーソン主演、『アイ・ウェント・ダウン』(*I Went Down*) を発表した。2000 年 4 月に東京で開催された「ケルティック・フィルム・フェスト」(Celtic Film Fest 2000) で公開された。

俳優のガブリエル・バーンは 1996 年に全編アイルランド語のテレビ映画用の脚本 *Draíocht* (英訳: magic or enchantment) を書き、それは公共放送 RTÉ で放送された。当時の恋人で RTÉ のディレクターだったアーニャ・オコナーが監督し、

キルデア州ロバーツタウンで撮影された。この 50 分のテレビ映画は、60 年代、ダンスホールでの男女の付き合いやエルヴィス・プレスリーのロックンロールなどアメリカ文化が片田舎に入ってきて、アイルランドらしい牧歌的な暮らしがまるで魔法にかかったかのように変わりゆく時代を描いている。全編アイルランド語の映画がそれほど多いとはいえない中、貴重な作品だ。脚本を書いたバーンは、2000 年、米インサイド・アクターズ・スタジオでのジェームズ・リプトンとのトーク・ショーで、「アイルランド語の脚本は好きだから書けた。人間的に尊敬していたオコナーとの出会いは特別で仕事も思い出に残るものだ」と語っている。

2006 年、*An Teanga Runda* (英訳: *The Secret Language*) は、若手の短編映画監督ブライアン・ダーニンの作品だ。父と息子のみがアイルランド語で情報を共有するという特殊性に立った秘密諜報部員をコメディータッチで描く。2007 年、札幌国際短編映画祭で『秘密の言葉』のタイトルで上映されている。同年、ボブ・クインの息子ロバート・クインは、全編アイルランド語のコメディ映画 *Cré na Cille* (英訳: Graveyard Clay) を撮る。ドニゴール出身のトム・コリンズはコルム・ミーニイ主演で、『キングス』(*Kings*, 2007) を監督した。1970 年代半ば、アイルランド西部、コネマラから出稼ぎでロンドンにやってきた 6 人の若者の人生がフラッシュバック手法を交えて語られる。40 代後半から 50 代前半、5 人のアイルランドの男たちは、故郷のコネマラを離れて 20 数年後、ロンドンのアイルランド人街パブで、同郷の男の通夜を営んでいた。いつかは故郷に錦を飾ろうと誰もが希望を持ってロンドンに出て来てがむしゃらに生きてきた。それぞれが経てきた人生を問わず語りに通夜の席でポツリポツリ話し始める時、彼らの話す言葉はいつしかアイルランド語になっていた。本作は 2008 年 2 月、東京で開催された「ノーザン・アイルランド・フィルム・フェスティバル 2008」(Northern Ireland Film Festival 2008) での上映を始め、数々の映画祭に出品された。

(宮地裕美子)

疎外された場所

『邪魔者は殺せ』

Odd Man Out (1947 年)

岩見寿子

1970年代から北アイルランド紛争が激しさを増し、国際的な関心を集めるようになると、イギリスやアメリカでは紛争を題材にしたアクション映画や政治サスペンス映画が数多く作られるようになった。けれども、第二次世界大戦終結の数年後に制作された『邪魔者は殺せ』をとりまく状況は、北アイルランド紛争以後に制作された作品とは大きく異なっている。

制作事情による映画スタイルの変化

『邪魔者は殺せ』はイギリス映画の黄金時代（1940～49）に生まれた名作の一つに数えられている。キャロル・リード監督は、F.L. グリーンが1945年に発表した小説を読み、映画化したいと考え、ベルファスト在住のグリーンをたずねて、シナリオの執筆を依頼した。一方、当時イギリス映画会社の最大手だったランク・オーガニゼーションは、イギリスとアイルランドでの映画配給網におけるハリウッドの独占状態を崩そうとしていた。ランク社が『邪魔者は殺せ』と *Captain Boycott* (1947) という、アイルランドを舞台にした2本の映画を制作した背景にはそういった事情があったという。^{*1}

リード監督はベルファストでオール・ロケーションを行うことを希望したので、制作会社は北アイルランド自治政府関係者と接触し意向を探ろうとした。ユニオニスト^{*2} 政権を刺激しないように、この作品はいかなる政治的意図も持たないことが強調され、IRA という固有名詞も出さないことが確約された。

しかし、このような事前の根回しにもかかわらず、公式な協力を得ることはできず、外景の一部はベルファストで撮影されたものの、大部分はイギリスの屋外とスタジオ内のセッ



^{*1}
Lance Pettitt, *Screening Ireland: Film and Television Representation*, Manchester: Manchester University Press, 2000.

^{*2}
ユニオニストとナショナリスト
ユニオニストとは、北アイルランドが英国に帰属することを支持する人々で、多くは英国からの入植者の子孫であり宗派はプロテスタント。英国王に忠誠を誓っているのが、ロイヤリストとも呼ばれる。それに対してナショナリストとは北が英国から独立し南北アイルランド統一を主張する人々を指す。リパブリカン（共和主義者）とも呼ばれ、カトリックが多い。双方ともに穏健派から武装過激派組織までさまざまな政党や団体があった。

*3

ハーランド & ウルフ造船所

ベルファストは港湾都市であり造船業で栄えた。この造船所でタイタニック号など巨大客船が建造された。



*4

時計塔

正式にはアルバート・メモリアル・クロックタワーといい、ヴィクトリア女王の夫君アルバート公を記念して、ベルファストのクイーンズスクエアに建造された。



ベルファストの時計塔

*5

フィルム・ノワール

犯罪・サスペンス映画のサブジャンル。舞台となるのは無機質な都市空間で、登場人物は疎外と退廃の中で生きており、自分ではコントロールできない宿命にとらわれている。明暗のコントラストが強烈な照明、夜の場面の多用、アンバランスな構図などを特徴とする。

トで制作された。完成した作品は1947年にロンドンとベルファストで盛大なプレミア上映が行われ大ヒットを記録した。批評家の多くもこの作品を高く評価したが、北アイルランド問題を背景にしながら、あまりにも政治的・社会的要素が希薄であることを批判する見解もあった。

先に述べたような事情から、この作品は、北アイルランドの政治的・社会的状況を意図的にぼかしている。冒頭に出てくる背景解説のクレジットでも、具体的地名は特定されず、IRA という名前は出ずに単に非法組織となっている。けれども、それに続く空中撮影による俯瞰ショットは、ケープの丘やベルファスト港、ハーランド & ウルフ造船所*3などを次々と眼下に収め、この都市がベルファストと特定できるリアリティを出している。

しだいに降下するカメラは造船所のドックの景観を一望しながら、時計塔*4に行き着く。クローズアップされた時計の文字盤は午後4時を示し、時を知らせるチャイムが鳴り響く。

その後、非法組織のリーダーであるジョニーと仲間たちが、活動資金稼ぎのために工場襲撃を執行する。逃亡の際にピストルで撃たれて負傷したジョニーは、仲間の車から振り落とされて路地に置き去りにされてしまう。そのときもカメラは、空襲を受けたテラスハウスの焼け跡にできた空地、そこで遊ぶみずばらしい服装の子供たちなどを描写することで、第二次世界大戦直後の疲弊した都市の雰囲気を明確に捉えている。

けれども、ジョニーがやっとの思いで防空壕に身を隠すあたりから、夜の場面に入ると映画のリアリズムは影をひそめ、明暗のコントラストの強い表現主義的スタイルが支配的となる。主人公の迷い込む防空壕、路地裏、狭い室内といった閉鎖的な空間設計はフィルム・ノワール*5というジャンルに特徴的な様式性を示している。主人公は迷路のような場所で、自分ではコントロールできない状況の網の目に囚われてしまう。また、頻繁に挿入される時計塔の文字盤と時刻を告げるチャイムの音は、時間の経過を示すだけでなく、後戻りの不可能なことをたえず主人公と観客に提示し、宿命論的な展開

『静かなる男』

The Quiet Man (1952 年)

岩見寿子



西部劇の巨匠として知られるジョン・フォードの本名は、ジョン・フィーニといい、両親がゴールウェイからアメリカに移民したアイルランド系アメリカ人である。自分のルーツであるアイルランドをモチーフにしたこの作品は彼のフィルムグラフィーの中で重要な位置を占めている。

原風景としてのアイルランド

第二次世界大戦前から映画を撮っているフォードが、アイルランドでロケーションをしたのは、『静かなる男』が最初というのは意外な感じがしないでもない。フォードが実際にアイルランドで撮った作品は、この他に『月の出の脱走』(*The Rising of the Moon*, 1957)、そして病気のため途中で監督を降りてしまった『若き日のキャシディ』(*Young Cassidy*, 1965) の 2 本だけである。アイルランド独立戦争期を背景にした『男の敵』(*The Informer*, 1935) は全てスタジオのセットで撮られた。『静かなる男』の制作エピソードは、孫のダン・フォードが書いた『ジョン・フォード伝』*1 に詳しく紹介されている。

*1

ダン・フォード著、高橋千尋訳『ジョン・フォード伝 一親父と呼ばれた映画監督』文藝春秋 1987 年

この映画が製作されたのは 1951 年だが、ドラマはアイルランドの動乱の時期である 1920 年代に設定されている。『静かなる男』の最初の頃の草稿は、どれも至るところに〈動乱〉の描写が書きこまれており、イニスフリー村がイギリスの警備隊に痛めつけられるシーンが続出していた。だが、ストーリーの形が整ってくるにつれ、フォードはどう考えてもそれらのシーンはストーリーにそぐわないと思うようになった。『静かなる男』は愛の物語であると同時にコメディであり、暴力と弾圧の荒々しいシーンはムードのぶち壊しもいいところだった。フォードはストーリーを大切にするためにそれらを取り除いた。

この映画が撮影されたのは、フォードの父の故郷に近い、アイルランド西部にあるメイヨー州の小さな村congである。北のマスク湖と南のコリブ湖にはさまれた風光明媚な場所で、ラフカディオ・ハーン*2も子供の頃、親戚を訪ねて毎年ここに遊びに来ていたという。原作や最初のシナリオ段階では別の名前であった村の名を、フォードはW.B. イェイツ*3の有名な詩からとってイニスフリーと変えた。イェイツは、「イニスフリーの湖島」*The Lake Isle of Innisfree* の詩作のインスピレーションを、ロンドンの雑踏のなかで得たという。アイルランドへの望郷の想いを、幼い頃に親しんだ土地であるスライゴの湖に浮かぶ小さな島の風景に託したのだ。

映画のオープニング・クレジットでは、13世紀に立てられたゴシック様式のアシュフォード城の堂々たるシルエットを背景に、感傷的でノスタルジックな *The Isle of Innisfree* のメロディーが流れる。この曲は劇中でもたびたび登場し、映画の主題曲ともいえるものだが、作詞作曲したのはアイルランド生まれのディック・ファレリーで、本職は警察官である。彼はラジオのインタビュー番組で、イニスフリーとはアイルランドの別名であり、それはこの曲を書いたときに自分の心のなかにあった場所なのだと述べたという。ファレリーの心情は、そっくりそのままフォードにも重ねることができる。「イニスフリー」とは現実のアイルランドの場所ではなく、イェイツのように異郷に身を置くアイルランド人が、あるいはフォードのようなアイルランド移民の子孫が思い描く、原風景としての抽象化されたアイルランドを示す記号なのである。

伝統と近代の遭遇

主人公ショーンは、アメリカの都会で経験した忌まわしい過去の思い出から逃れ、生まれ故郷のアイルランドの田舎で再出発しようとしてやってくる。イニスフリーへ向う途中、村への案内人ミケリーンに、自分が育った鉄鋼の街ピッツバーグでは、溶鉱炉はとても熱く、人は地獄の恐怖を忘れるほどだと語る。そのような彼にとってイニスフリーはまさし

*2

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850 ~ 1904)
小説家、紀行作家。母はギリシャ人。幼い頃に両親が離婚したため、父の故郷アイルランドの大叔母の下で成長した。アメリカでの新聞記者生活を経て1890年来日。日本国籍を取得して小泉八雲と名乗る。数多くの著作を通して欧米に日本文化を紹介した。

*3

W.B. イェイツ (William Butler Yeats 1865 ~ 1939)
詩人・劇作家。アイルランド古来の伝説や民話を収集し、19世紀末のアイルランド文芸復興運動の中心人物となる。ダブリンのアベイ劇場創設にも尽力。日本の能に影響を受けた作品も発表している。1923年にノーベル文学賞受賞。

西へ～異郷への眼差し

『白馬の伝説』

Into the West (1992 年)

前村 敦

アイルランド人は、死者や霊魂、妖怪、妖精などが住む異郷をどのように想像してきたのだろうか。異郷の住人がいるのは、ごつごつした岩肌の丘の地下や緑の茂みの中、海の上や底だ。そして、海辺などの境界に出没して人間と出会う。海に囲まれたアイルランドでは、広く大西洋が広がる西の方向に異郷を思い描いてきた。同じく島国である日本と重ね合わせてみると、理解しやすいだろう。

アイルランド映画の中にも『レプリコーン 妖精伝説』(*The Magical Legend of the Leprechauns*, 1999) や『プランケット城への招待状』(*High Spirits*, 1988) といった、異郷やその住人が登場する作品がある一方、『オンディーヌ 海辺の恋人』(*Ondine*, 2009) のように異郷の存在そのものは現れなくても、物語の重要な鍵になる場合もある。

常若の国

アイルランド人の異郷への眼差しを提示してくれる代表的な映画の一つが『白馬の伝説』だ。この映画では、アイルランドの人々が想像してきた異郷を知る際に重要な「西」「死者」「海」といった要素が織り込まれている。

ダブリン空港に近い団地に定住を始めた漂泊民(トラベラー、イティナラント、ティンカーなどと呼ばれる)＊1の父親パパ・ライリーと、その2人の息子、弟オシー、兄ティトーの物語である。

兄弟の祖父が西の地方から白馬を連れて来る。白馬は不思議とオシーには従順だった。兄弟は白馬をチル・ナ・ヌオグ(*Tír na nÓg* = 常若の国)と名付け団地で飼い始めるが、住民の通報で警察に連れて行かれる。白馬は跳躍力が抜群で、悪徳警官が馬術好きの富豪に売ってしまう。馬術大会の会場で何とか馬を取り返した兄弟は、2人だけで白馬に乗り、カウボーイ気取りで西の地方(「西部」)に逃げる。警察と富豪は白



＊1 漂泊民

『アイルランドの漂泊民』(ジョージ・グメルク)などの書籍や資料によると、トラベラー(traveller)は漂泊民が自らを表現する言葉。ティンカー(tinker)は主に定住者が漂泊民を指す際に用いる。イティナラント(itinerant)は政府やメディアが使う用語とされる。



ロケで使われた、ダブリンのハーフペニーブリッジ

馬を奪うため、そしてパパ・ライリーと漂泊民の間は兄弟を救うため、それぞれ彼らの後を追う。

監督はイギリス生まれのマイク・ニューウェル。『フォー・ウェディング』(1994)、『モナリザ・スマイル』(2003)などで知られ、ハリー・ポッターシリーズの『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(2005)でもメガホンを執った。脚本は祖国にこだわった映画を撮り続けているアイルランド人ジム・シェリダン。父親役のガブリエル・バーンはアイルランドを代表する俳優の一人だ。兄弟を演じるのは、ティトー役にルーアリー・コンロイ。オシー役はキアラン・フィッツジェラルド。この2人は子役として、『ナッシング・パーソナル』(1995)でも共演している。兄弟の祖父役にデヴィッド・ケリー。アイルランド映画では常連のコルム・ミーニイや、撮影当時ガブリエル・バーンの妻だったエレン・バーキンらが脇を固めている。

『白馬の伝説』の原題は*Into the West*。アイルランドの海の異郷は、西の海の彼方に存在する幸福な場所がよく知られている。典型的な異郷のうち、多くは海の彼方や底に設定されている。Tír na hÓige (チル・ナ・ホイゲ)、Hy Brasil (ハイ・ブラゼル)といった名前が付いている異郷の場合、そこの風景や住人たちの姿も、詳しく描写されていることが多い。これらは、チル・ナ・ヌオグに代表されていると言っていいだろう。

異郷チル・ナ・ヌオグは、ジェームズ・キャメロン監督の『タイタニック』(1997)でも描かれる。間もなく沈没しそうなタイタニックの船内で、母親が子供たちに常若の国として海の底にあるチル・ナ・ヌオグの話聞かせ、寝かしつけようとしている。アイルランドのクイーンズタウン(現コーヴ)が最後の寄港地だったタイタニック号。この家族はアイルランドから乗り込んだのだろう。そして、観客は、チル・ナ・ヌオグがアイルランドのポピュラーな異郷の名前だと知らされる。

境界に現れる者たち

『白馬の伝説』は、原題*Into the West*が示唆する通り、西

■ Pat O'Connor

—パット・オコナー（1943～）



1943年10月3日、アイルランド南部アードモアで生まれる。ウォーターフォード州リズモアで育ち、他の5人の兄弟と一緒に地元の映画館に通ううち、映画の魅力に引かれていった。14歳から17歳にかけて中等学校をいくつか転校したが、ロンドンにも住んだ。アメリカのロサンゼルスのカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の映画学科に進むが、途中断念し、一度ロンドンに戻る。オコナーは保険会社の事務員や作業員の仕事を経験した後、カナダ、トロントのライアーソン大学の映画学科に進学する機会を得る。映画を再度学び直したことで、アイルランド公共放送RTÉに職を得ることになり、6年にわたり、テレビプロデューサーとしてキャリアを積み、多くのテレビドラマやドキュメンタリー作品を手がける。

1982年、RTÉがBBCと共同制作したテレビドラマ*Ballroom of Romance*を監督した。ウィリアム・トレヴァー原作（「ロマンスのダンスホール」のタイトルで邦訳が複数、短編集の中に収められている）の作品だ。50年代のアイルランド西部が舞台で、海外への移住によって農業人口が激減してしまった地域の近隣住民が互いに詮索しあう住み難さ、生き難さを田園の風景をバックに诗情豊かに描く。主演のブレンダ・フリッカーは撮影当時30代後半、結婚しない農家の娘役を演じている。彼女は7年後、『マイ・レフトフット』で米アカデミー賞のオスカーを獲得が、ここですでに納得できる演技を披露している。

本作は英アカデミー賞（BAFTA）の劇映画部門でみごと最優秀賞を獲得した。オコナーはかつて暮

らしたウォーターフォードの情景を余すところなく記憶し細部にこだわり再現したようだ。

83年まで、ドキュメンタリーとドラマ部門で手腕を発揮してテレビ業界で高い評価を受ける。さらに84年、オコナーは、デヴィッド・パットナムに強く推されて長編映画『キャル』（*Ca*）を監督し、一躍脚光を浴びる。プロテスタントで警察官だった夫をIRAに殺されたカトリックの妻が、夫の死の1年後、若い男キャルと恋に落ちる。IRAとは距離を置き生きてきたキャルだったが、流されるままIRAのドライバーをやり、警察官殺害事件に巻き込まれてしまう。相手役のヘレン・ミレンは、情熱的だが控えめな難しい役どころを演じてカンヌ映画祭の最優秀主演女優賞を受賞した。ジョン・リンチはタイトル・ロールの誘惑に負けやすい気弱なキャルを演じ、俳優としてのデビューを飾った。

政治的な文脈からではなく、人間の感情や人々とのつながりに焦点を当てるオコナーの手法は冴えわたる。それがアイルランドを舞台にしてアイルランド人のオコナーが撮る時、明確なテーマを観る者に訴えかけてくる。あるインタビューでオコナー監督は、次のように語っている。

「北アイルランド紛争の背景は、民族問題であると同時に宗教問題でもある。アイルランドとイギリスは異なる部分ばかり強調されるが、共通する部分もたくさんある。例えるならば、アイルランドとイギリスの関係は、離婚しそうでしない夫婦関係に似ている」

あとがき

1980年代くらいまでの日本では、一般的に「アイルランド映画」として連想されるのは、『アラン』、『静かなる男』、『ライアンの娘』といった、イギリスやアメリカで制作された作品であった。けれどもオスカーを受賞したことで『マイ・レフトフット』が話題になり、NHKなどで繰り返し放送された。筆者はアイルランド近現代史を専門としていたが、その頃からアイルランド関係の映画リストを作り始めた。アイルランドが制作に関わっているか否かにかかわらず、アイルランドを舞台にしている、もしくはアイルランドの文化・社会、歴史をテーマにしているものを広義の「アイルランド映画」と規定したうえでの作業である。

当時はインターネット検索などができなかったので、リスト作りは容易ではなかった。けれども少しずつ作業が進捗し、それを素材にして、1993年3月に日本アイルランド協会主催の St.Patrick's Day の集いにおいて、「新世代のアイリッシュ・シネマ」という演題で講演する機会をいただいた。アイルランドの映画制作の歴史と近年の活況についてご紹介したところ、多くの方々から強い関心を寄せられ、これらの声に力を得て、アイルランド映画研究に本腰を入れることになった。

日本の人たちにアイルランド映画をもっと知ってほしいという思いは、やがてアイルランド映画祭開催という夢の実現につながっていく。宮地裕美子さんとは映画祭の準備過程で知り合った。資金確保は大仕事だったが、作品選びにも大変な苦労があった。ダブリンのアイリッシュ・フィルム・アーカイブまで出向いて候補作選びをしたりもした。多大な困難の末に、多くの人々の熱意と支援に支えられて、1996年2月15日から19日まで、東京の草月ホールにて日本初のアイルランド映画祭を開催することができた。上映作品は『エンジェル』(1982)、『白馬の伝

説』(1992)、『フィオナの海』(1994)、『ダブリン・バスのオスカー・ワイルド』(1994)、『サークル・オブ・フレンズ』(1995)、『ナッシング・パーソナル』(1995)の6本である。『エンジェル』はニール・ジョーダン監督のデビュー作であるが、『殺人天使』のタイトルでビデオは出ていたものの、劇場未公開の作品。『ダブリン・バスのオスカー・ワイルド』は配給権がありながら公開予定がなく、映画祭で日の目を見ることになったもので、我々で邦題をつけ、字幕を手配したという思い出深い作品である。

映画祭ゲストとしてアイルランドから『ナッシング・パーソナル』のサディアス・オサリヴァン監督が来日し、映画評論家の淀川長治氏や、実行委員にも名前を連ねてくれた白井佳夫氏にジョン・フォードやジョン・ヒューストンなど、アイルランドにゆかりの深い往年の名監督のことを舞台上で熱く語っていただいた。第一に招聘しなかったのは、ニール・ジョーダン監督であったが、『マイケル・コリンズ』の撮影に入っていた時期だったために、調整がつかず実現しなかった。しかし、当時の日本においては、ほとんど知られていなかったオサリヴァン監督を広く紹介できた意義は少なくなかった。その後、同監督はハリウッドに進出し、知名度も格段にアップすることになる。

映画祭にかかわった委員のうち、日本アイルランド協会の会員でもある筆者たち有志が、協会の活動の一環として、アイルランド文化研究会を発足させた。ほぼ毎月定期的に開催し、映画講座のほか、アイルランドの音楽、食文化、スポーツ、フォークロアなど様々なテーマを取り上げた。研究会の成果としては『図説アイルランド』(上野格と共著 河出書房新社 1999年)がある。一時期休会していたが、現在は再開し地道な活動を続けている。

筆者は成城大学文芸学部の非常勤講師として、アイルランド映画をテキストに、アイルランドの歴史と文化についての講義を担当している。本書の第2章で取り上げた作品論の多くは、講義の準備用に作成したノートがもとになっている。宮地裕美子さんは長らくゲール語を学び、

毎日ウィークリーの記者として、パット・オコナーやニール・ジョーダン、キリアン・マーフィーを含む来日映画人をインタビューした経歴を持つ。前村敦さんは学生時代にアイルランドのフォークロアを専攻し、ゴールウェイに長年通ううちに、当地在住の映画監督ボブ・クインと出会い、「映画のことを書き続けるように」といわれた言葉を糧にしているという。

文化研究会にてアイルランド映画講座を一緒に続けてきた二人に筆者が声を掛け、出版を構想してから実に6年以上の月日がたってしまった。本書の全体的な構成は岩見が考え、3名で執筆を分担した。巻末資料のうち、日本での公開作品リスト、歴史略年表、アイルランド映画史年表は岩見が担当し、地図と人名索引は宮地が担当して地名や人名の表記統一をはかった。また、本文に掲載したアイルランドの写真は、宮地と前村が現地で撮影したものである。

最後になりましたが、私たちが持ち込んだ企画の出版を認めていただいた論創社の森下紀夫社長、辛抱強く原稿が届くのを待っていてくれた編集の松永裕衣子さん、画像の照会などでお世話になった駐日アイルランド大使館広報・文化担当官のアッシュリン・ブレーデンさん、同アシスタントの上村智子さん、そのほか様々な面で支援していただいた皆様に篤く御礼申し上げます。

2018年5月

岩見寿子

日本で公開されたアイルランド映画リスト (2018 年 2 月現在)

【凡例】

*西暦は制作年を示す (IMDb のデータに依拠)

*年 / 月 / 日は日本での劇場公開年月日を示す (allcinema のデータに依拠)

*劇場未公開の場合の記号：

(V) 劇場公開されずビデオまたは DVD がリリース

(TV) 劇場公開されず BS や CS 等のテレビで放映

(映画祭) 日本で開催された映画祭で上映

参考ウェブサイト：

◆ Internet Movie Database

<http://us.imdb.com/>

◆ allcinema online

<http://www.allcinema.net/prog/index2.php>

●血涙の志士 *Hangman's House*

1928 年 1928/10/ アメリカ サイレント

監督：ジョン・フォード

出演：ヴィクター・マクラグレン、ホバート・ボズワース

●ジュノーと孔雀 *Juno and the Paycock*

1929 年 未公開 (V) イギリス

監督：アルフレッド・ヒッチコック

出演：サラ・オールグッド、パリー・フィッツジェラルド

●アラン *Man of Aran*

1934 年 1935/03/ イギリス

監督：ロバート・フラハティ

出演：コールマン・キング、マリー・ディレイン

●男の敵 *The Informer*

1935 年 1935/08/ アメリカ

監督：ジョン・フォード

出演：ヴィクター・マクラグレン、ヘザー・エンジェル

●市街戦 *Beloved Enemy*

1936 年 未公開 (V) アメリカ

監督：ヘンリー・C・ボッター

出演：ブライアン・エイハーン、マール・オベロン

●邪魔者は殺せ *Odd Man Out*

1947 年 1951/8/28 イギリス

監督：キャロル・リード

出演：ジェームズ・メイソン、キャサリン・ライアン

●静かなる男 *The Quiet Man*

1952 年 1953/3/3 アメリカ

監督：ジョン・フォード

出演：ジョン・ウェイン、モーリン・オハラ

●ジェントル・ガンマン *The Gentle Gunman*

1952 年 未公開 (V) イギリス

監督：ペイジ・ディアデン

出演：ダーク・ボガード、ジョン・ミルズ

●自由の旗風 *Captain Lightfoot*

1955 年 1955/3/26 アメリカ

監督：ダグラス・サーク

出演：ロック・ハドソン、バーバラ・ラッシュ

●月の出の脱走 *The Rising of the Moon*

1957 年 1959/ アイルランド

監督：ジョン・フォード

出演：ノエル・パーセル、シリル・キューザック

●地獄で握手しろ *Shake Hands with the Devil*

1959年 1959/8/12 アメリカ

監督:マイケル・アンダーソン

出演:ジェームズ・キャグニー、ドン・マレー

●四つの願い *Darby O'Gill and the Little People*

1959年 1960/3/23 アメリカ

監督:ロバート・ステューヴンソン

出演:アルバート・シャープ、ショーン・コネリー

●ディメンシャ 13 *Dementia 13*

1963年 未公開 (V) アメリカ

監督:フランシス・フォード・コッポラ

出演:ウィリアム・キャンベル、ルアナ・アンダーズ

●若き日のキャンディ *Young Cassidy*

1965年 未公開 (TV) イギリス

監督:ジャック・カーディフ、ジョン・フォード

出演:ロッド・テイラー、フローラ・ロブソン

●ライアの娘 *Ryan's Daughter*

1970年 1971/4/24 イギリス

監督:デヴィッド・リー

出演:サラ・マイルズ、ロバート・ミッチャム

●ロバート・アルトマンのイメージズ *Images*

1972年 未公開 (V) アイルランド

監督:ロバート・アルトマン

出演:スザンナ・ヨーク、ルネ・オーベルジョノフ

●マッキントッシュの男 *The Mackintosh Man*

1973年 1974/2/9 アメリカ

監督:ジョン・ヒューストン

出演:ポール・ニューマン、ドミニク・サンダ

●地獄の殺戮都市 *A Quiet Day in Belfast*

1974年 未公開 (V) アメリカ

監督:ミラド・ペサダ

出演:マーゴット・キダー、バリー・フォスター

●怒りの日 *Hennessy*

1975年 1975/10/25 イギリス

監督:ドン・シャープ

出演:ロッド・スタイガー、リー・レミック

●バリー・リンドン *Barry Lyndon*

1975年 1976/7/3 イギリス

監督:スタンリー・キューブリック

出演:ライアン・オニール、マリサ・ベレンソン

●男と女のアバンチュール/紫のタクシー *Un Taxi Mauve / The Purple Taxi*

1977年 未公開 (V) フランス、イタリア、アイルランド

監督:イヴ・ボワセ

出演:シャーロット・ランプリング、フレッド・アステア

●光年のかなた *Light Years Away / Les Annees Lumieres*

1980年 1985/1/22 フランス、スイス

監督:アラン・タネール

出演:トレヴァー・ハワード、ミック・フォード

●エクスカリバー *Excalibur*

1981年 1981/10 イギリス

監督:ジョン・ブアマン

出演:ナイジェル・テリー、ヘレン・ミレン

●殺人天使 *Angel*

1982年 未公開 (V/映画祭) アイルランド、イギリス

監督:ニール・ジョーダン

出演:ステューヴン・レイ、アラン・デヴリン

●あの頃に帰りたい *How Many Miles to Babylon?*

1982年 未公開 (V) イギリス

監督:モイラ・アームストロング

出演:ダニエル・デイ＝ルイス、クリストファー・フェアバンク

●キャル *Cal*

1984年 1989/9/22 イギリス

監督:パット・オコナー

出演:ジョン・リンチ、ヘレン・ミレン

●7月、ある4日間 *Four Days in July*

1985年 未公開 (映画祭) イギリス

監督:マイク・リー

出演:ブリッド・ブレナン、ステューヴン・レイ

●ザ・デッド/「ダブリン市民」より *The Dead*

1987年 1988/9/3 アメリカ

監督:ジョン・ヒューストン

出演:ドナル・マッカン、アンジェリカ・ヒューストン

映画題名索引

【数字】

『007 ゴールデンアイ』 GoldenEye 1995 225
『007 ダイ・アナザー・デイ』 Die Another Day 2002 225
『007 リビング・デイルイツ』 The Living Daylights 1987 224
『7月、ある4日間』 Four Days in July 1984 190
『12月の花嫁』 December Bride 1991 170,192, 202
『17 セブンティーン』 Telling Lies in America 1997 234
『28日後…』 28 Days Later... 2002 226, 232

【アルファベット】

『A.I.』 Artificial Intelligence: A.I. 2001 226
『B モンキー』 B. Monkey 1998 234
『CHLOE/ クロエ』 Chloe 2009 223
『ELVIS エルヴィス』 Elvis 2005 TV 235
『IN DREAMS/ 殺意の森』 In Dreams 1999 207, 219
『ONCE ダブリンの街角で』 Once 2007 013, 148-152, 208
『P. S. アイラブユー』 P. S. I Love You 2007 175
『S.W.A.T.』 S.W.A.T. 2003 231
『THE FALL 警視ステラ・ギブソン』 The Fall 2013 ~ 2016 TV 012
『THE TUDORS ~背徳の王冠~』 The Tudors 2007 ~ 2010 TV 012, 215, 235

【ア】

『アイ・ウェント・ダウン』 I Went Down 1997 019
『アイランド・ライジング』 Rebel Heart 2001 TV 166
『赤い仔馬』 The Red Pony 1973 TV 213
『秋の旅路』 The Love She Sought 1990 TV 176
『あの日の指輪を待つきみへ』 Closing the Ring 2007 175, 217

『アバウト・アダム アダムにも秘密がある』 About Adam 2000 124-128
『アメリカン・アウトロー』 American Outlaws 2001 231
『アラバマ物語』 To Kill a Mockingbird 1962 214
『アラビアのロレンス』 Lawrence of Arabia 1962 037, 214
『荒鷲の翼』 The Wings of Eagles 1957 212
『アラン』 Man of Aran 1934 007, 022-026, 069, 129
『アルバート氏の人生』 Albert Nobbs 2011 217, 227, 239
『アンジェラの灰』 Angela's Ashes 1999 153, 175, 176

【イ】

『いつまでも二人で』 With or Without You 1999 192
『イン・アメリカ / 三つの小さな願いごと』 In America 2002 204
『イングリッシュマン in ニューヨーク』 Stars and Bars 1988 201
『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』 Interview with the Vampire 1994 165, 207, 219, 237
『インドへの道』 A Passage to India 1984 041

【ウ】

『ヴァイキング~海の覇者たち~』 Vikings 2013 ~ TV 012
『ヴァン』 The Van 1996 073
『ヴィーナス』 Venus 2006 215
『ウェイクアップ!ネッド』 Waking Ned 1998 181, 228
『ウェルカム・トゥ・サラエボ』 Welcome To Sarajevo 1997 228
『ヴェロニカ・ゲリン』 Veronica Guerin 2003 122, 123, 185, 216, 231, 238

【エ】

『エクスカリバー』 Excalibur 1981 042-046, 118, 206, 220, 222

著者略歴

岩見寿子 (いわみ・ひさこ)

お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了。現在、成城大学文芸学部非常勤講師。日本アイルランド協会理事。主な論考：「アイルランド映画産業の現在」（『エール』15号 日本アイルランド協会学術研究部1995年）、「アイリッシュ・シネマの現在形」（『ユリイカ』青土社2000年2月号）、「渾石から清順へーホモフォビアの近代ー」（『男たちの絆 東アジア映画』所収、平凡社2004年）。翻訳：P. B. エリス著『アイルランド史一民族と階級』（堀越智と共訳 論創社1991年）、W. トレヴァー著『フルズ・オブ・フォーチュン』（論創社1992年）

宮地裕美子 (みやじ・ゆみこ)

東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了。毎日ウィークリー編集などを経て現在、国士舘大学21世紀アジア学部業務委託非常勤講師。日本アイルランド協会幹事。著作：『やさしいゲール語読本Ⅰ』（三橋敦子と共著 大学書林1987年）、翻訳：『現代思想』総特集ユーゴスラビア解体（分担翻訳）（青土社 1997年）、CD歌詞対訳：（リバーダンス、アルタンほか11アルバム）、ゲール語監修：映画『麦の穂をゆらす風』（2006年）

前村 敦 (まえむら・あつし)

筑波大学大学院修士課程地域研究研究科修了。修論のテーマはアイルランド西部の海の異郷観。現在、時事通信社に勤務。中央官庁を長く取材してきた。映画をテーマにコラムなども執筆。日本アイルランド協会幹事。

映画で語るアイルランド

幻想のケルトからリアルなアイルランドへ

2018年6月20日 初版第1刷印刷

2018年6月30日 初版第1刷発行

著 者 岩見寿子 宮地裕美子 前村 敦

発 行 者 森下紀夫

発 行 所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
tel. 03-3264-5254 fax. 03-3264-5232
振替口座 00160-1-155266

装幀・ブックデザイン 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1702-6 ©2018 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。